

H・M・エンツェンスベルガーの 『意識産業論』

青木 順三

雑誌『シュビーゲル』といえは、戦後の西ドイツで大いに成功した週刊誌としてすでに有名であるが、エンツェンスベルガーは、一九五七年に、『シュビーゲルの言葉』と題する放送講演の中で、この雑誌のスタイルを犀利に分析している。彼のエンツェイの魅力は、誰でもが知っている周知の事実につまなく新しい角度から光を当ててみせるそのカメラアングルの斬新さにあるとともに、彼の文章そのものの、切れ味のよい独特な軽妙さにあるといつてよい。たとえばこの講演の中でも、彼が『シュビーゲル』の文体を模してゲーテの生涯を描いてみせた短文のくだりなどはまことに秀逸で、読者は思わず失笑せざるをえないし、彼のきらめくような才気を感じさせる。しかし、彼は単なる文才ゆたかな戯文家ではない。彼はここでニュース・ストーリーという形式を分析し、その原理の系譜をたどつて、次のような重要な指摘をしている。すなわち、彼によれば、この形式は、筆者が全智全能の立場に立つことを前提とせざるを得ないという点で、事実の客観的報道とは本質的に相容れず、

しかも、それは常にヒーローを必要とするために、原理的にいへば、歴史を形成する原動力を個々人の中に求める世界観への関連が深く、したがって、デモクラシーの古典的原理よりは、むしろナチス時代のスローガンだったいわゆる指導者原理と強い親近関係を持つものだといふのである。

ところで、この放送はかなりのセンセーションを呼んだらしい。毎号五〇万部近くを売り尽くし、言論界のみならず政界財界にも巨大な影響力を持つ雑誌に対する痛烈な批判であつてみれば、それももつともであらう。そして、エンツェンスベルガー自身が一九六二年版に付記しているところによると、『シュビーゲル』誌そのものが、放送の数日後、この講演の一部を掲載させてほしいと申し入れて来たとのことであり、彼はこれに承諾を与えたといふ。ある雑誌の編集方針やその文体に対する根本的原理的な批判が、当のその雑誌に掲載されるということ、この皮肉な事実は、ただ単に、それが『シュビーゲル』誌の売り物である無原則的な、いわば八方破れの編集の仕方を示す事例であるにとどまらず、ジャーナリズムの機関が現代社会の知的精神的活動一般の中で占めている独特な地位とそのあり方を暗示するものである。彼の批判は、この場合はたまたま『シュビーゲル』に関するものであるが、もつと一般的には、ジャーナリズム批判である。そして、このような批判は、それがたとえいかに正当であり興味深いものであつても、ジャーナリズムによって受容され公表され伝達されない限り、読者大衆の手許に届くことがないのである。エンツェンスベルガーのジャーナ

リズム批判は、自分自身が置かれているこうした立場の限界ないし自己矛盾にあくまでこだわることから出発する。右にふれた一九六二年版の付記の中で、彼は、この間の事情を次のように概括している。

「……批評家の仕事は、単に書かれるだけでなく、多くの人に伝えられねばならない。伝えられない限り、彼の仕事は無意味であり、無効である。したがって、批評家の生産手段としては、机と椅子、紙と鉛筆のみならず、意識産業の大規模な装置が必要である。しかし、周知のとおり、彼はこの装置を自分の意のままに動かすことはできない。それどころか、この装置が彼の批判の当の対象である人々の手中にあることも稀ではない。もっとも、それだからといって批判を発表する可能性が奪われるという意味ではない。批判の発表は許せぬと思うほど弱味を感じたり、ないしは、それを暴力的に妨害しても大丈夫だと思ふほど自分の力を信ずることができるのは、全体主義的支配者だけである。これに対して、民主主義を名のる社会では、こうした名目を守るだけのためにも、批判を許容せざるを得ない。このような社会は、批判に対して一定の活動領域を容認するのだが、その領域の限界を決めるのは、批判そのものの側ではなく、支配者の側が、利益を考慮して、つまり戦術的観点に立って決めるのである。批評家がこの限界を承認してしまえば、彼はすでに自分の地歩を放棄したことになる。一方、もしこの限界を踏み越えれば、彼はその生産手段を失う。これこそ批評家が日々直面するジレンマであり、これを力に訴えて解消すること

とは、彼にはできないのである。」⁽¹⁾

これは、自己の文筆活動ないし文学活動の社会的基盤についての認識であり、その問題性と限界との意識化の作業であろう。『シュビーゲル』批判への付記の中に書かれているとしても、これは単なる一週刊誌の批判ではない。やはり、エンツェンスベルガー自身の用語に従って、「意識産業」批判と名付けるべき内容的広がりを持つものである。

一九六二年に出版された彼の最初のエッセイ集『個々のもの』の巻頭に収められている『意識産業論』は、このような問題に関する彼の見解を、もっとも包括的にまとめたものである。彼は、上記の『シュビーゲル』批判(五七)のほか、ニュース映画論(五七)、ポケット版廉価本の批判(五八)、旅行業論(五八)、通信販売カタログの分析(六〇)、フランクフルター・アルゲマイネ新聞批判(六二)等、「個々のもの」についてそれぞれ興味深いケース・スタディを書き、その上に立って、この『意識産業論』を書いたのである。

「意識産業」という耳慣れない言葉は、エンツェンスベルガーの造語である。しかし、彼がかならずしも奇を衒っているのではないことは、その論旨をみれば納得することができ。彼は、個々の人間の意識というものは決して自立的自主的なものではなく、一箇の社会的産物であるということ、ことに、最近約百年の間に、人間の意識が工業的手段によって仲介され誘導されるようになって以来、この傾向がますます強くなったという事実を指摘することによって筆を起す。彼は意識産業とは何か

という定義を明確に下してはいない。しかし、新聞、出版、放送など一切のいわゆるジャーナリズムのほか、映画、レコード、広告、さらにモード、旅行業、それに教育を含め、何等かの点でおよそ人間の意識の形成に影響を与えうる産業を、彼は意識産業と名付けているように思われる。このことは、『個々のものに収録されているエッセイの個々のテーマを見て明らかである。』

彼によれば、意識産業は、二十世紀に固有な基幹産業である。今日、高度に発達した国家にクーデターや革命が起きたり、あるいは他国によって占領が行われたりした場合、新政府がまず占拠するのは、道路とか重工業のセンターとかではなくて、放送局、通信機関、印刷所等々である。しかも、工業施設のエキスパートはその地位にとどまることを許されるのに対して、意識産業を動かしている担当者たちは直ちにその地位を逐われる。このことから、意識産業の重要性を明らかにすることができるといふ。

ついで、エンツェンスベルガーは、意識産業が成立するための前提条件について、哲学的、政治的、経済的、技術的という四つの観点から、その成立史を概観している。この中で特に興味深い指摘は、第二、第三の条件である。すなわち、人権宣言、特に自由と平等という権利の宣言（宣言であって実現ではない）が、意識産業成立の政治的前提条件であるという。フランス革命や十月革命、あるいはアメリカの独立宣言等々によって、「まず各人は共同の運命について、また自己の運命について意

のままに決する権利を持つというフィクションが「宣言される。そして、このフィクションがあるために、個々人および社会が自己について持つ意識が政治問題になり、またこの意識を誘導し支配することが、将来の支配権確保のための必須条件になるという。また経済的には、初期資本主義の本源の蓄積の時代を過ぎ、生産力が高まって、労働時間の短縮、生活水準の向上が行われた後になって、はじめて意識産業はその発達をみるというのが彼の見解である。つまり、高度の技術革新が行われ、市民大衆の生活に大量の余暇が生じている現今の社会の状況こそ、エンツェンスベルガーのいう意識産業がその最盛期を迎えるに適した状況ということになるだろう。しかも、このような状況は、単に資本主義社会においてのみ生じているわけではない。従って、意識産業を批判する場合にも、その資本主義の一変種だけを頭においていたのでは不十分である、と彼はいう。すなわち、意識産業が私企業であるか、国営、公営のいずれであるかは、あまり問題にはならない。そうではなくて、「それがどのような社会的委託を負っているか、ということが問題なのである。」そして、この委託の内容は、今日、どこでも同一であり、それは、「現存する支配体制の永遠化」という課題である。——これが彼の意識産業論の大きな論点の一つになっている。資本主義体制下におけるジャーナリズムに対する批判等は、左翼陣営からしばしば行われているが、この批判の正当性を彼は必ずしも否定するわけではない。彼はむしろ、そんなことはわかりきった、いうまでもない事実として認めた上で、たとえば

社会主義体制下において意識産業が果している役割も本質的には同じであるという事実を目を向けることを要求するのである。資本主義であると社会主義であることを問わず、物質的搾取が赤裸々な形で行われるような時期が終れば、今度は非物質的搾取が、すなわちいわば意識の搾取が大きな意味を持つようになる。つまり、独立宣言や人権宣言がひとたび発せられている以上は、「いかなる支配者といえども原理的に不安定であり、被支配者の支持がなければ存続できない。支配者はこの支持を求めねばならず、不断に自己自身を正当化せざるをえない」ということなのである。そのためには、搾取を廃止するのではなく、搾取されているという意識を廃止する必要がある。この目的のために、意識産業の全手段が動員される。かくて、大多数の人間は非物質的貧困化を強制され、ごく少数の政治的全能者がこれを支配することになる。しかも、このような、政治的にまったく無力な多数者は、極端な場合、集団的自殺のような決定すらも唯々諾々として受け入れる。これこそ、今日における意識産業の最大の成果である。——このように、エンツェンスベルガーは、意識産業の成立と現状とを概括する。この場合、社会科学の用語が多く援用されているにしても、彼の説くところは社会科学に厳密なものとは勿論いえないし、彼自身そのようなことを要求しているわけでもないだろう。注目すべきは発想の新鮮さであり、問題の提起である。

さて、エンツェンスベルガーが意識産業の本質について指摘している重要な点——そして、これがこのエッセイの結論にも

連っていく——は、意識産業とその消費者である個人との間、また意識産業とその生産者である真に創造的な少数の知識人との間にそれぞれ成立っている「二重の関係」の問題である。彼によれば、意識産業は、個人々が意識や判断や決定の能力を抽象的権利として持つ（これが人権宣言等々であり、市民的デモクラシーの成立であることはいうまでもない）ことを前提として成立するのだが、単にそればかりではなく、「このような能力を、常に新たに呼び起こすという自家撞着を犯す」のである。つまり、意識産業は、その時々々の所与の支配体制を安定させ、固定化するという課題を負うているにもかかわらず、その産業の本性からして、いわば意図せざる結果としてこのような支配体制に対する批判を呼び起こさずにおかないということ、そしてこのような結果を完全に回避しようとすれば、産業の命脈そのものが絶たれてしまうということなのである。さらに同様な関係が、この産業の生産者である知識人との間に、いっそう鋭い形で存在するという。つまり、産業としての意識産業が関わり得る分野は、芸術とか学問とか、またその他の人間の意識の働きの創造過程そのものではなくて、「その仲介、二次的三次的誘導、浸透作用の面のみ」である。

「意識産業にその原初のエネルギーを与えるのは、どんな種類のものであれ、その支配者ではない。エネルギーの源泉は、意識産業が除去することを委託されている当の少数者から発している。すなわち、意識産業が傍役として軽蔑したり、あるいはスターとして石化させてしまったりする著作家たち、まず彼

等を搾取してこそはじめて消費者大衆を搾取することが可能となるようなこうした著作家たちが、エネルギーを供給するのだ。産業の顧客たちにあてはまることは、ましてやその創り手にあてはまる。創り手たちは、意識産業のパートナーであって、しかも同時に敵でもある。意識の大量生産に没頭することによって、意識産業は、自己自身の矛盾を大量生産し、自己に委ねられた委託と自己が果すこととの間の差異を拡大していく。⁽³⁾——ここにおいて、知識人は何をすべきか。それは、意識産業が持っているこうした矛盾を認識し、これを逆手にとって、危険な賭にみずから加わり、巧妙な「奸智」をもって意識産業を利用し、知識人が負っている委託、すなわち現存の支配体制に対する真の批判を行うことである。「そのためには新しい知識がいる。どのような圧力にも即応できるような醒めた心がいる。」これが現在における知識人の責務だ、というのがエンツェンスベルガーの結論である。

エンツェンスベルガーがこの意識産業論を書くにあたって頭においていた歴史的現実、一方ではナチス時代のドイツやスターリン時代のソヴィエトであり、また一方では、これにもましてアメリカを先頭とする今日の西ヨーロッパの全「自由主義国家」、とりわけ救い難くコンフォームズムが浸透している戦後ドイツの精神状況であろう。このような状況に対するいらだちは、彼の場合はなほだ強烈であって、それは、このエッセイのみならず、彼が書く他のどの文章からも読みとることができ。「この国では、あきらかにどのようなやり方においても、

知的なことがらが実践的政治的エネルギーに転化されることがないのだ⁽⁴⁾」と、彼は別のエッセイの中でも書いている。しかし、このようないらだちは、彼のみではなく、現在のドイツの多くの作家や知識人に共通のものであって、ただ彼の説に独特な点は、体制に対する批判が、体制批判という、自分自身もその陣営に属している立場に内在する危険、ことにこの立場からする言論活動が内包している危険な要素に対する容赦ない自己批判と常に結びついていることであろう。

一九六七年一〇月からアメリカのウエズレー大学の客員教授の職にあった彼は、一九六八年一月、突然辞任して帰国したが、この時辞任の理由を学長に宛てて説明した手紙の中で、彼は次のように書いている。

「今日、反体制派というものは、それが書かれた言葉たるにとどまっている限り、支配権力によって許容され、調節され、いやそれどころかある点までは奨励されてさえいるような、無害な観賞用スポーツに墮す危険があります。アメリカの大学は、こうした曖昧な遊戯のための恰好な遊び場になっています。」そして彼は、自分がアメリカの大学に席をおいて、しかも金銭的援助を受け、こうしてアメリカに滞在しているという単なるこの事実だけでも、自分は武装を解除されることになるのだし、自分の発言は矛先を鈍らされることになるという事実⁽⁵⁾に気付いた、と述べている。こうした言動もすべて、意識産業論以来一貫した彼の論理に貫かれていることは明らかであろう。

エンツェンスベルガーは、最近数年間は、雑誌『時刻表』⁽⁶⁾の

編集に熱意を傾けており、しかもこの雑誌でみる限りでは、彼の最近の活動は詩人としてのものではなく、ほとんど専ら犀利な時評家としてのものである。この雑誌の二号に掲載された『周辺部ヨーロッパ』という彼の一文をめぐって、ベーター・ヴァイスとの間で交された論争は、同様に尖鋭な現代的問題意識を持った二人の作家の間の論争として示唆に富んでいたが、この場合の争点の一つは、時代の現況、特に社会主義ないし共產主義が近來国際的にますます複雑な様相を示すに至っている事実についての認識の差違であったように私には思われる。つまり「共產主義という単数形の言葉は、今日では、もはや正確に内容を示すことができるような意味を持っていません⁽⁸⁾」という認識が、ヴァイスには——もちろん、ないとはいえぬまでも——薄弱なのではないか、ということである。

一方、今一つ、もっと重要な争点は、反体制的・批判的言論を發表することの意味に関する自己認識の深度の差、ないしはそうした言論と自己自身の毎日の生活行動との落差に関わる良心のやましさの感覚の差であるように思われる。決意すること自体に何の意味があるのか。信条告白を何百回繰返したところでそれが何だというのか。その上、高度に発達した先進国にあって、われわれ自身は意識産業に依拠して暮しているのだという事実を君は一体どう考えているのか。こうしたいらだたしげな詰問を、エンツェンスベルガーはベーター・ヴァイスにつきつけているのである。ここに現われているのは、二人の作家の間の単なる政治的姿勢の違いだけではないだろう。それは、お

そらく文学的資質の深部に関わる問題である。それにしても、意識産業と著作家との間の二重の関係を認識していない意識産業批判は「すべて無効であるか、さもなければ危険である。……この場合、すべて弁証法でない批判は発言権がない⁽⁷⁾」という言葉で、エンツェンスベルガーは、この時ヴァイスに言いたかったのではないだろうか。この点に関しては、意識産業を論じて、自己の文学活動に対して厳しい懷疑をつきつけ、現状確認と自己批判の作業を徹底して行ったエンツェンスベルガーの方に幾分か歩があるのではないだろうか。

とはいえ、最後に、私自身にとって未解決な疑問を付記しておかなければならない。エンツェンスベルガーは、常に厳しく問題を提起し、虚偽や曖昧さをあくまで仮借なくあばき立てる。しかし、彼のこうした舌鋒の鋭さは、彼のラディカリズムが常にネガティブな形で提出されることから生じているところはないだろうか。そして、たとえば『詩と政治』に特にはっきりと現われているような、詩が本来持っている批判性への楽天的とすらいえるほどの信頼と、さらにもう一つ、あえていえば、『政治と犯罪』の中に含まれているエッセイ『絶対を夢想する人々』の中で、テロリストを描いている筆致の中にその典型的表現を見出しているような、一種のアナーキズムへの傾斜——と私には思われるのだが——とは、このこととどう関連しているのだろうか。

(1) Hans Magnus Enzensberger: Die Sprache des "Spiegel" (1957) Erster Zusatz: Über die Produkt-

- tionsmittel der Kritik (1962) [H. M. Enzensberger: Einzelheiten I Bewußtseins-Industrie (edition suhrkamp 63) Frankfurt a. M. 1964 所載「一〇一ページ」]
- (2) 特に「ちぎに列挙したサーマのロマンイがさうで、いわらば、それをも前掲の edition suhrkamp 63 に収載された」。
- (3) 前掲書「一六ページ」。
- (4) H. M. Enzensberger: Deutschland unter anderm.
- Äußerungen zur Politik (edition suhrkamp 203) Frankfurt a. M. 1967 四四ページ。
- (5) H. M. Enzensberger: Warum ich Amerika verlasse. "Die Zeit" 一九六八年三月一日巻「一六ページ」。
- (6) 前掲紙「同一箇所」。
- (7) H. M. Enzensberger: Bewußtseins-Industrie 前掲書「一六ページ」。

(一橋大学助教授)